

ンマカメラ (ADAC Vertex) で L 字型 180° 収集を行った。全過程で短時間の自動処理が可能で、きわめて良好な再現性を示した。前処理フィルターの cut off 値は 0.45 が適当であった。90° 欠損で心筋描出は適正で、180° 欠損では前壁欠損で左室容積値は高値を、下後壁欠損では低値を示した。

9. $^{201}\text{TlCl}$ および $^{123}\text{I-MIBG}$ で異常集積を認めた好酸球性心筋炎の1例

末永 一路 (県立尾張病院・放)
岩崎 浩康 吉本 学 (同・放技)
津田 誠 岩田 一城 大野 淳
吉田 幸彦 岡本 光弘 (同・循内)

症例は 21 歳、男性。主訴は心窓部痛と呼吸困難。
'96 年 10 月 18 日入院時 ECG で下壁梗塞は否定できなかったが、末梢血好酸球が高値を呈した。入院時 $^{201}\text{TlCl}$ で心尖下壁の集積が不良であったが、 $^{99m}\text{Tc-PYP}$ で有意な取り込みはなかった。11 月 5 日心筋生検で心筋への好酸球浸潤が認められ、好酸球性心筋炎と診断された。プレドニン投与により症状は改善し、末梢血好酸球も正常値に回復し、11 月 25 日退院。プレドニンは漸減投与し、外来にて経過観察。
'97 年 2 月 4 日の $^{201}\text{TlCl}$ ではほとんど異常を認めず、 $^{123}\text{I-MIBG}$ で心尖部下壁に明らかな集積の低下を認めた。しかし、この時の心筋生検所見では炎症性変化はほとんど見られず、また臨床経過も良好である。

10. Ga シンチが診断に有用であった心臓原発悪性腫瘍の一例

岩野 信吾 田所 匡典 小林 英敏
石垣 武男 (名大・放)
牧野 直樹 廣田 秀輝
(トヨタ記念病院・放)
熊谷 亮 上原 晋 稲垣 春男
(同・循)

Ga シンチで診断可能であった稀な心臓原発悪性リンパ腫症例を経験したので報告した。[症例] 68 歳、男性。胸痛と呼吸困難を主訴に受診し、心嚢液・胸水貯留を認めたため入院となった。胸部 CT で右心室前壁～右房に腫瘍を認め、 ^{201}Tl シンチで比較的高度な集積が見られた。 ^{67}Ga シンチを施行したところ非

常に高度な集積像を認め、全身検索にてほかに病変が見られないことから、心臓原発悪性リンパ腫を疑った。胸腔鏡下心臓生検で悪性リンパ腫 (diffuse large, B) の診断が確定した。CHOP 療法で PR が得られた。Ga シンチと ^{123}I シンチは鑑別診断に有用と思われた。

11. 肺腺癌の病理所見と FDG 集積との関連性

綾部浩一郎	田村智奈美	高橋 直樹
釘抜 正明	谷口 充	玉村 裕保
大口 学	東 光太郎	興村 哲郎
山本 達		(金沢医大・放)
上田 善道		(同・病理)
関 宏恭		(金沢循環器病院)

末梢型肺腺癌の FDG 集積と術後病理所見 (胸膜浸潤、脈管内浸潤、リンパ管内浸潤、リンパ節転移) とを対比し、末梢型肺腺癌の悪性度と FDG 集積との関連性について検討した。対象は、術前に FDG-PET を施行した末梢型肺腺癌手術例 33 症例 (35 病巣) である。FDG-PET は、FDG 111–148 MBq 静注 40 分後に撮像した。肺癌の FDG 集積程度は、視覚的に縦隔の radioactivity を指標として 5 段階に分類し、さらに SUV を算出した。その結果 FDG 集積が高い末梢型肺腺癌は胸膜浸潤、リンパ管内浸潤、あるいはリンパ節転移の頻度が高い傾向が認められた。このことから、FDG-PET により末梢型肺腺癌の悪性度を非侵襲的にある程度評価できる可能性が示唆された。

12. ガリウムシンチにて集積を認めた空腸癌の一例

田口 美紀	土田 龍郎	高橋 範雄
石井 靖		(福井医大・放)

症例は 56 歳男性。貧血、便潜血にて胃、大腸の精査施行するも異常なく、小腸連続透視にて狭窄性病変が疑われ、Ga シンチにて 24 時間後も移動しない強い集積を認め、小腸悪性腫瘍が疑われた。有管法では空腸に全周性狭窄を認めた。術後診断は高分化腺癌、T4N0M0 で深達度 SE であった。大腸癌への Ga の集積については文献的報告があり、大腸癌の約 70% で陽性になり、腫瘍細胞そのものに集積すると考えられている。深達度が深いほど、腫瘍が大きい

ほど、分化度が低いほど陽性率は高くなるが、本症例では分化度は高いものの腫瘍の大きさ、深達度が強い集積に関与したと考えられる。消化管原発の腺癌の診断において ⁶⁷Ga シンチはあまり有用性が評価されていないが、強い集積を示した空腸癌の1例を経験したので報告した。

13. 全身性リンパ節腫大を伴ったシェーグレン症候群の一例 ; ⁶⁷Ga シンチグラフィによる経時的評価

清水 正司 渡部 直人 将積 浩子
 藤山 昌成 金澤 貴 豊嶋心一郎
 富澤 岳人 亀田 圭介 平尾 謙
 瀬戸 光 (富山医薬大・放)

症例は40歳、男性。主訴は両側頸下腺および涙腺腫大、頸部およびえき窩リンパ節腫大、乾燥症状であった。外来初診時の ⁶⁷Ga シンチグラフィでは両側頸下腺、涙腺および縦隔への集積増加が認められた。外来通院中に全身性リンパ節腫大の増悪が認められ、⁶⁷Ga シンチグラフィの再検査では縦隔への集積増加がさらに亢進していた。当院内科入院精査の結果、症例はリンパ増殖性疾患の合併が強く疑われたシェーグレン症候群であった。⁶⁷Ga シンチグラフィは唾液腺の炎症の活動性の評価だけではなく、シェーグレン症候群におけるリンパ増殖性疾患の合併の診断とその経過観察に有用であると考えられた。

14. RI による大腸通過時間の検討——慢性特発性偽性腸閉塞症の2症例——

大野 和子 倉部 輝久 鈴木賢一朗
 梶原 顯彦 堀 浩 村田 勝人
 伊藤 要子 綾川 良雄 宮田 伸樹
 (愛知医大・放)
 山本ゆかり (同・二内)

慢性特発性偽性腸閉塞症 (CIIP) は、反復してイレウス症状を呈するにもかかわらず機械的に閉塞を認めない原因不明の症候群である。本邦では過去19年間に54例が報告され、死亡例は約16%である。近年は cisapride が有効な治療薬とされているが、自覚症状軽減後も腸管内のガス残存が多く、的確な効果

判定は困難である。われわれは、本疾患が疑われた患者2名に対して、RIを経口投与後経時に撮像することにより、上行、横行、下行、S状結腸、直腸の各通過時間を測定した。本法による機能的大腸通過時間の定量は、CIIPの診断および治療効果判定に有効と思われた。

15. 一回および二回採血法による血漿クリアランスの測定(第一報)——^{99m}Tc-MAG3 および ¹³¹I-OIH との比較——

金澤 貴 清水 正司 藤山 昌成
 亀田 圭介 富澤 岳人 豊嶋心一郎
 渡辺 直人 瀬戸 光 (富山医薬大・放)

一回採血法、二回採血法により MAG3 と OIH のクリアランス値を算出し、一回と二回採血法の間の相関、MAG3 と OIH のクリアランス値の間の相関を検討。また同時に MAG3/OIH クリアランス比も求め、検討した。対象は19~28歳の腎疾患を有しない健常者13名。一回採血法と二回採血法とで比較したものではどちらも良い相関を示したが、MAG3 と OIH クリアランス値とを比較したものでは、相関係数は0.7程度でややばらつきが認められた。MAG3/OIH クリアランス比は、一回採血法では0.63、二回採血法では、0.72となった。